令和２年度第２回中央区地域支えあいづくり協議体　（議事録）

日時：　　令和３年１月25日（月）　午前10時～11時45分

場所：　　中央区社会福祉協議会３階会議室

議事録次第：

１　開会

２　会長挨拶

３　議題

（１）　高齢者施策推進室より報告

（２）　生活支援コーディネーターによる取組みについて

（３）　「支えあいのまちづくり協議体（第２層協議体)」実施報告

（４）　各委員からの意見・報告

テーマ「コロナ禍での交流とフレイル予防」

4　今後の協議体実施予定

5　閉会

出席者【委員】

髙橋　恵子　　聖路加国際大学　国際・地域連携センター：PCC 開発・地域連携室
鈴木　康子　　民生・児童委員協議会　京橋地域高齢福祉部会
平賀　淳子　　民生・児童委員協議会　日本橋地域高齢福祉部会
村上　久子　　民生・児童委員協議会　月島地域高齢福祉部会
浜野　豊　　中央区生きがい活動リーダー
吉田　千晴　　京橋おとしより相談センター
水野　みゆき　日本橋おとしより相談センター
當山　貴子　　月島おとしより相談センター
加久　哲也　　中央区桜川敬老館孤立防止・生きがい推進担当
島谷　恒伸　　中央区浜町敬老館孤立防止・生きがい推進担当
近藤　剛　　中央区勝どき敬老館副館長（孤立防止・生きがい推進担当代理）
片桐　義晴　　中央区社会福祉協議会　管理部地域ささえあい課長
古田島　幹雄　中央区社会福祉協議会　事務局長
吉田　和子　　中央区高齢者施策推進室長
清水　一実　　中央区福祉保健部高齢者福祉課長
平川　康行　　中央区福祉保健部介護保険課長
（敬称略：順不同）

配布資料：

資料１　　中央区地域支えあいづくり協議体運営要綱
資料２　　中央区高齢者通いの場マップ
資料３　　「退職後の生き方塾」チラシ
資料４　　「生きがいデザインセミナー」チラシ
資料５　　令和２年度生活支援コーディネーターによる取り組みについて
資料６　　支えあいのまちづくり協議体（第２層協議体）実施報告

議題説明：

（１）中央区高齢者施策推進室より事業報告
（２）生活支援コーディネーターより事業報告
（３）生活支援コーディネーターより、支えあいのまちづくり協議体実施報告

●上記事業説明及び配布資料への質問事項：

なし

第８回各委員からの意見・報告
テーマ「コロナ禍での交流とフレイル予防」

（民生委員の見守り活動、地域活動について）
・毎月、高齢者宅への見守り活動と、ふれあい福祉委員会で誕生日にお花をプレゼントする活動を２０年ほど続けている。そのため、コロナ禍でも電話をかけると高齢者が喜んで出てくれて、日頃の活動成果だと感じている。互いに挨拶を交わし合う関係性が地域でできていることを誇らしく思っている。
・高齢者通いの場のスタッフをしている。コロナの影響で春先から中止になっていたが、会場を広い場所に移し開催回数を減らして再開した。再開後はおやつの提供を止め、換気や消毒の備品をそろえ、ソーシャルディスタンスを意識して実施している。参加者は再開を非常に喜んでおり、開催回数を増やしてほしいという要望もある。スタッフもそれに応えたい気持ちはあるが、状況をみて慎重に検討している。
・町会と一緒にできる取り組みがないか考えている。５年、１０年経つと高齢化も進んでくる。町会と共に見守り活動などを行いたいが、自分も高齢になってきており率先して取り組むことも難しく、悩んでいる。

（生きがい活動リーダーの地域活動について）
・資料６を見ると、日頃活動をしていて感じていることが多く記載されている。「何かに参加をしたい」、「誰かと話をしたい」という高齢者は多い。ただ、運営側としては新型コロナウイルスの感染リスクをまず考える。参加者の意欲と活動者の想いにどう折り合いをつけるかは大きな課題である。また、以前は集まって公園をウォーキングする「ポールウォーキング（専用ポールを持って歩く運動）」の活動をしていたが、コロナ禍で中止した。中止後にこれまでの参加者に向けてアンケートを取ったところ、全員が「自粛で体力が弱まった」という回答だった。自粛の影響は今まで運動の習慣があった人にも大きく出ている。

（コロナ禍でのおとしより相談センターの相談対応について）
・精神的に鬱症状が出ている、家族関係が悪化して虐待に近い事象が起こっている、体力・筋力が低下して歩行速度が遅くなったという相談が増えている。一方、遠方に住む子供や孫と LINE やテレビ電話でのやり取りが増え、家族関係が改善した方も少数だがいる。体力や筋力の低下への対応については、自宅で体操を自分だけで習慣化していくことは難しい。そのため、体操後に自分でカレンダーにシールを貼ってもらうなど達成動機の視覚化をして、訪問時に職員が確認をして達成感が得られる工夫をしている。訪問が難しい場合は電話や手紙の頻度を増やしている。包括だけでは細やかな対応が難しくなっているので、敬老館や薬局の薬剤師とも協力して高齢者の様子を確認している。

・10 月から住民参加の２つのサロン、カフェを再開した。カフェについては、屋外で３回開催した。感染予防を目的として屋外で開催したが、「これまで参加に抵抗感があったがオープンスペースのため参加しやすい」という方がいるなどの効果もあった。家族として初めて認知症の本人と一緒に参加した方に対し、家族の悩みをその場でスタッフが受け止めて次につなげることができた。高齢者からは、身体を動かしたいという相談がある。高齢者通いの場が緊急事態宣言中は中止しているため、独自で体操教室を行っているジム（通常は高齢者通いの場を実施）や、リハビリを行っている民間のフィットネススタジオ、敬老館などを案内している。
・出前講座はコロナ禍で中止しており、来年度以降の企画を話し合っている。介護者サロンや認知症サポーター養成講座は再開している。介護者サロンを１月に開催したところ、初参加の方もいて参加者数が予想より多かった。区民向けの認知症サポーター養成講座は感染予防で通常より定員を減らしている分以上にキャンセル待ちが多く、関心が高まっている印象である。相談対応では、自粛期間が長くなり家族の軋轢が表面化しやすいのか、子どもが絡んだ家族問題や兄弟間の暴力など、おとしより相談センターとしてどう対応すべきかどうか悩ましいケースが立て続けにあった。また、最近まで元気だったのに急激に身体状況が悪化して動けない、という相談や緊急搬送が必要なケースが年明けから増えている。医療機関に優先してつなげなくてはいけない状態だが、コロナ禍で病床も空いておらず、入院に時間がかかったケースもある。

（生活支援コーディネーターの地域支援について）
・地域活動の従事者はおおむね３つの考え方に分かれている。外出先や集まりがない今の時期だからこそ活動を行うべきという方、コロナ禍なので活動は控えたいという方、活動すべきかどうか判断に迷っている方がいる。正解はなく、それぞれのグループの判断を尊重していくしかない。また、元々地域でつながりがある方は工夫してつながりを保っているが、居住歴が浅いなどの理由で地域とのつながりが弱い方については、生活課題の深刻化が心配である。支援機関や地域に速やかにつなげるためには、地域でのネットワークや継続的な活動が大事だと思う。資料に ZOOM 体験会の報告があったが、ICT を活用した新しいつながりづくりについて可能性を感じており、ICT が得意な人が地域の高齢者をつなぐハブ役になり、ハブ役を中心に少人数のオンライングループが作れると、やがて大きいつながりになっていくのではないだろうか。生活支援コーディネーターからも個々のグループに対してオンラインツールの具体的な提案をしていきたい。

（敬老館の取り組みについて）
・２回目の緊急事態宣言以降、敬老館は学習や娯楽などの文科系の講座とイベントは中止したが、運動系の講座は続けている。そのことは好評で、粋トレを行う講座の回数を通常の倍以上に増やしている。また、文科系の講座やイベント参加者へのフォロ

ーとして、講師の協力を得て動画をホームページに掲載している。桜川敬老館は 2/9 から新館で運営を開始するため、さらに利用者に積極的に利用してもらいたいと思っている。
・コロナ禍で大事なのは、孤立しない、させない、ということである。敬老館では来館者名簿を基に独居の方を中心に「お元気ですかコール」という安否確認を兼ねた事業紹介･来館勧奨を行う電話を掛けている。電話越しでも話がしたいという方が多い。電話以外の取り組みとしては、ホームページに英会話や数独の動画掲載を行っている。来館者には動画の視聴を勧めているが、自宅の ICT 環境により視聴ができない人もいるので、敬老館に来られない方や生活状況が見えない方をどうフォローするのか、課題として感じている。
・現在は常連の人を中心に 1 日 50 人程度が来館している。敬老館の利用者のうちホームページを見ているのは 15～20%程度であると感じている。スマホを所持していても電話しか使わない、電話以外の機能を知らないという高齢者が多い。このため、敬老館では昨年からスマホ講座を始めており、動画の視聴やアプリを使うことができる人を増やす取り組みをしている。スマホの操作は相対で基本的な事柄から教えていくため、高齢者が使いこなすには時間がかかると思うが、来年度も引き続きスマホ講座は実施したい。

（中央区の現況、課題、取組について）
・新型コロナウイルスは人との接触を最小限にしなくてはいけないため、地域で築いてきた人のつながりや交流が途切れないか、非常に心配である。もう一度人とのつながりを構築する、つながり直す、ということが今後必要になってくる。中央区の高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画を現在改定中だが、「互いに支え合い、自分らしくいきいきと暮らせるまち」という理念を前回の計画から継承している。大切な点は、地域共生社会やみんなで支え合う仕組みをどう作るかである。好きなことや趣味をきっかけに高齢者にも地域の支え手になってもらいたい。また、資料にもあったセカンドライフ応援セミナーや退職後の生き方塾などをきっかけにして、新たに地域とつながりを持ってもらえればと考えている。
・今までのつながりづくりは、身近な場所で大きな人の輪を作っていき、そこにつながりがなかった方を取り込んでいくというというものだったが、コロナ禍で難しくなっている。一方で、新たに少人数の運動の集まりができたり、敬老館では定員を減らして講座を維持する等の工夫もみられる。先日も、８６歳の方から敬老館の講座数が少なくなったので動画を併用して身体を動かす機会を作っているという話をお聞きした。そうした工夫が広がっていくといい。また、第２層協議体は地域の様々な方が集まる会議体なので、アイディアを活かして生活支援コーディネーターと共に取り組みを進めてもらいたい。

・前回８月の会議時点では、家族に止められてデイサービスの利用を控えているなどの理由で、介護保険サービスの利用状況が極端に落ち込んでいた。夏を過ぎてから回復傾向だが、まだ例年の水準までは戻っていない。介護保険サービスの利用に必要な要介護認定の申請件数も、例年より低い状況が続いている。多くの高齢者の体力が低下していることは問題視されているが、それに反して介護保険サービスの利用が控えられている状況である。高齢者の体力の低下傾向が続く中で、介護認定申請件数がいつ増加に転じるのか注視している。また、非常に心身が悪化した状態で急に相談機関へとつながることが起きており、前段階がなくなっている。介護保険サービスを利用していない方とのつながりをどう作るかは大きな課題であるため、つながりを維持する様々な工夫が今は非常に大事だと考えている。
・社会福祉協議会が支援しているボランティア活動や地域活動については、最初の緊急事態宣言時は全面的に中止という対応だったが、今回の緊急事態宣言では一律には中止の要請はしていない。感染防止対策のアドバイスやチラシ作成、消毒液やマスクの配布などのサポートをしている。活動を中止するか否かはそれぞれの団体や活動者の判断に委ねるほかないと思う。感染防止対策を前提に、各団体と話し合いながら対応していく方針である。

（総括）
　いま起きていることや各々の機関で工夫をしていることをこの場で共有することができ、今後について検討するきっかけになったのではないか。この一年で世の中が大きく変化したが、これまでの活動によるつながりが今に活かせている。
　これまでの報告で、気になった点を何点か挙げる。急に身体機能の変化が生じて介護ではなく医療機関につなぐケースが出ていることについては、もう少し早い段階での対応を考える必要がある。併せて、介護保険の申請件数が例年より低いことも気にしておきたい。コロナ禍による活動の工夫では、ICT を活用する動きが出ている。人々のスマートフォンの所持率が高くなっているため、ICT を積極的に活用してはどうか。相談機能も ICT の利用を含めながら考えていけるといい。その他に、活動を続けていくことで顔見知りの関係性が築ける。しかし、つながりを持っていない方を心配する意見があった。心身状態が悪化する前にどう様子を見守っていくのかは課題である。また、感染症対策を皆が気にしており、中央区で感染対策の情報発信があると安心して活動ができるのではないか。